



Title	固有性と普遍性をつなぐ空間構成の展開
Author(s)	末包, 伸吾
Citation	デザイン理論. 2008, 52, p. 132-133
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53499">https://doi.org/10.18910/53499</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 固有性と普遍性をつなぐ空間構成の展開

末包伸吾／神戸大学

建築をつくりだす上で、常に意識しているのは、その建築に与えられた諸条件の固有性を徹底的に引き出しながら、それを、固有性の内部に留めおいた解決ではなく、いかに普遍性を持たせうのかということである。この固有性と普遍性を仲立ちするものとして、そしてコンセプトと具体的な空間を仲立ちするものとして、さらに、教育・研究と設計を仲立ちするものとして、空間構成を軸に思考を、設計を展開してきた。

空間構成への着眼は、建築を様式で捉えようとする視座の相対化とともにあるもので、ある意味で近代的な思考過程と歩を一にするものもある。ロージエの『建築試論』における建築の原型への視座にはじまるところ、こうした相対化は、J. N. L. デュランが19世紀初頭に『建築教程の概要』で端的に示したように、建築を様式ではなく空間構成として把握可能であることは、逆に、C. ロウが『マニエリスムと近代建築』において A. パラディオとル・コルビュジエを空間構成の点から相同性を指摘することで、歴史からの断絶を主張した近代建築における歴史性の内包へと繋がるものとなる。空間構成への着目は、建築の原型への視座という視点を保つことにより、建築の連綿たる歴史の相へと返還される回路を有することにより、普遍性を企図するものとなると考えられる。

b-in-d、そして、夙川の家という2題の住宅における小さな試みではあるが、固有性と普遍性を空間構成で繋ぎとめようとした試行でもある。

### b-in-d

敷地は豊川インターから約1分の場所にあり、大幅員の道路と店舗を田畠や小規模開発の住宅が囲む、インター近郊の典型的な景観を呈している。ここに親子5人が居住し、どの様な使い方にも対応できる居間、内外ともに光と開放感あふれる空間、そして地区のイメージの先導的役割を果たすことが求められた。これらの諸条件から密接に関連した3つのテーマが浮上した。

- ・都市と風景のスケール：一般的にはコートハウスの形式が適しているように思われるが、それではこの荒漠たる風景には到底拮抗できない。この敷地条件、特にその風景のスケールを顕在化させる。
- ・敷地と外部空間構成：内外の空間を図と地として対比的に扱うのではなく、等価なものとして扱うこと。そのために敷地全体を覆うヴォリュームを想定し、そこにヴォイドを介在させることで、強固な形式を通じて拡散的な広がりを作り出す。
- ・内部空間構成：廊下により付加的に室が加



えられる大邸宅特有の構成ではなく、土間として想定された居間を中心に、行為に応じた空間の分節を行う構成が、同時に他の諸室の構成やこの住宅自身の構造や設備配置を規定すること。

こうした特殊なテーマを含有した構成を探し出すことが課題となった。敷地の東西方向に間口一杯にひろがる門型フレームを4つ均等に配する。このフレームにより作り出されるヴォイドの交錯が運動を誘い、それにより様々な風景を再定義し風景のスケールと呼応する。さらにこのフレームによって周辺環境とのゆるやかな融合と分離をはたし、内外空間の等価性を達成するとともに、一体的なボリュームである内部空間の分節とその外部への拡張を達成した。

### 夙川の家

・Reflecting：阪神間を代表する良好な住宅地である夙川の、道路から45度の角度で登る丘に敷地は位置する。丘に住むということ、そして北は六甲山麓に開け、南は市街地を経由して海に開けた、阪神間に特有のトポロジーを最大限にいかす空間とその構成を導くことが主題である。

・Translating：傾斜のついた3枚の壁が丘に突き刺さる。これら3枚の壁の頂部を屋根がシームレスに結ぶ。限定的な構成の手法により多様な場が生成されることが企図された。それは、丘に住み、山へ、海へと拡がる、様々な空間体験へと誘うことでもある。3枚の壁は、空間の融合と分離、空間の分節と拡張をつなぎとめる空間構成の主軸になり、さらに完結性を回避する概念装置として想定されている。

・Characterizing：玄関とホールは全体を切り取りながら接続を果たす「valley」、地階の和室は「cave」、リビング・ダイニングの北側は六甲山系を臨む「mountain」、南側は丘の頂の台地でふと息をつく安心感ある

「ground」、2階のホールの南端は浮遊感ある頂き「peak」、北側の子供部屋は空に開けた「sky」、南側の子供部屋は緑越しに海を遠くに臨む「ocean」、低い天井と南北への抜けが斜面地でのキャンプを想起させる主寝室の「camping」。この住宅を構成する諸空間は、それぞれ阪神間の丘という場のイメージを、アナロジカルにそしてアフォーダブルに展開したものである。

・Tracing：シークエンシャルに展開する空、山、海、緑、そして、分け入る、登る、降りる、見上げる、見下ろす、仰ぎ見るといった様々な体験は丘を巡る体験に他ならない。アプローチの割り肌の石、エントランスの大判タイル、1階の硬いカリンのフローリング、そして2階の柔らかなノーザンッシュのフローリングなど、諸室を構成する素材も、丘に住み・巡るというイメージから導かれ、それを強化（トレース）するよう選択されている。

